



“自ら枠を超えて行動を起こし、新たな価値を生み出す精神” をいかに育むか

教育推進部教授 山田 剛史

正解なき予測困難な時代と 受動的でも快適な日常

現代は正解なき予測困難な時代（VUCA）と表現されます。学生が卒業後に待ち受ける社会は極めて複雑であり、人口減少をはじめ解決困難な多くの課題を抱えています。他方で、物質的な豊かさは増し、スマートフォンを介して指先1つであらゆる欲求が叶えられる時代です。SNSを通じて友人関係を形成・維持し、好きな動画や映画、音楽を視聴し、好きな洋服を買う。学生はこれらに多くの時間とエネルギーを割いています。もちろん、オンデマンド授業や学習コンテンツの視聴、世界中の情報へのアクセスなど様々な利点もありますが、どれほどの学生がそこに「主体的に」関わっているでしょうか。情報過多の中、「おすすめ機能」で考えなくても手元に快適なコンテンツが届きます。「受動的」でも十分に快適な日常を送ることができます。難しい情報は読み飛ばし、自分にとって理解しやすい軽いコンテンツだけが選択されます。多くの大人が、社会の厳しい変化・状況を説くも、学生の心にはなかなか響かないということもしばしばです。特に困っていないのですから。大人と学生の間に流れるこの大きな川にどう橋を架けていくのか。

易きに流れる行動の裏にある不安と 不満を理解する

学生にとってリアリティのある関心事は「今、ここ」にあって、数十年後に自分たちが置かれるであろう厳しい未来にはないとも言えますが、実際に学生はどのように感じているのでしょうか。本学で2023年7月に実施した学生調査（N=2,995）の結果を見えます（図1）。学生たちは未来を「見ていない」とも取れますが、未来に対して「見たくない」「見てもしようがない」という想いも垣間見えます。中学や高校、大学の教職員、親、SNS等からは、不安を煽るような言葉が溢れかえっています。それならせめて今を大事にしようという強い不安と切実さの表れとも取れます。私たち大人は不安を煽るばかりで、厳しい時代を力強く乗り越えていくための機会や関与（エンゲージメント）を十分に与えられているのでしょうか。不安の強さゆえにリスクを恐れて挑戦しない（できない）という心性を理解し、学生が挑戦する意思を、未来に対する希望を与えることこそ、教育機関が最もすべきことではないでしょうか。

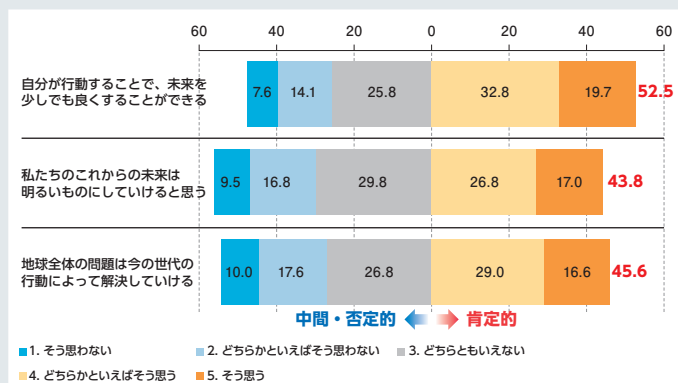


図1 関大生の未来に対する意識

「革新力」に関する関大生の実態

本学の「Kandai Vision 150」（2017-2036）に込められたメッセージには、「未来を問い、そして挑戦する」と掲げられています。そして、人材育成目標として「考動力」と並んで、新たな価値を創造し、多様性を生み出すことのできる「革新力」を身につけさせることが肝要と示されています。2022年度の卒業生調査（N=3,849）における考動力コンピテンシーの獲得感のうち、「革新力」に関わる項目を見ると、「既存の概念にとらわれず、新しい価値を生み出すためにチャレンジできる（24.6%）」「社会が抱える課題を把握し、解決に向けて踏み出すことができる（23.5%）」「現代社会の課題を自ら発見することができる（19.9%）」など、他のコンピテンシーに比しても低い値となっています。2023年度に実施した卒業生調査においては、学びと社会の接続（『学の実化』）に関するニーズの高さが示されたことから、正課内外において革新力を高めるための取り組みが求められます。

良質な失敗を経験できる アントレプレナーシップ教育の展開

近年、上述したような背景・認識のもと、アントレプレナーシップ教育の推進が期待されています。ちなみに、本稿の表題は文部科学省によるアントレプレナーシップの定義となっています。所謂、起業家育成だけを指すものではなく、高等教育のみならず、初等・中等教育など早期から取り組むことが重要と指摘されています。本学でも共通教養科目として「起業入門」や「サービスラーニング」が開講されていたり、特定学部において関連する専門科目やゼミなどでこうした教育も行われたりしています。

正課教育ではありませんが、本学地域連携センター主導のもと、新たなソーシャル・アントレプレナーシップ育成プログラムが創出されました。当該プログラムは2023年度の三菱みらい育成財団の助成事業の採択を受け、2023年度からスタートしています。複数の企業と連携し、社会課題の解決と自己の探究を主軸に据えたプログラムとなっています。今年度も6月末から11月末まで約5ヶ月にわたって実施予定です。当方もプログラムの企画・運営に携わっていますが、2023年度の受講生への効果検証より「革新力」や「アントレプレナーシップ」に関する能力が向上していることが示されました。

最後に、学生が社会課題の解決に向けて、協働しながら挑戦したり失敗したりできる機会や環境を創り出していくことが、これからの大学教育に求められるのではないのでしょうか。



図2 関大ソーシャル・アントレプレナーシッププログラム2023

大学史こぼれ話／アメリカ編①

ドイツ帰りの教師たちの苦悩

教育推進部教授 三浦 真琴

1810年にドイツで誕生した近代大学は、19世紀も後半を迎える頃には世界にドイツモデルとして伝播していき、各国の高等教育に影響を与えた。世界に冠たる高等教育機関となったドイツの大学は各国より若者や教師を惹きつけることになる。日本では教育界におけるドイツ主義の高まりなどを背景に1880年代以降の文部省派遣学生の留学先はドイツに集中するようになった。法律に基づく公式の大学の設立がドイツに5世紀近くも遅れ、当時、国内に実質的な大学が1校しかなかった日本にとって、それは当然のことであった。

アメリカにおける大学の開設は17世紀に入ってからのもので、日本よりは早いもののドイツより250年余り遅れた。ところが19世紀後半に、その校数はドイツばかりかヨーロッパ全体の総数をはるかに上回る。1880年にはカレッジならびにユニバーシティ併せて364校を数えたと記録されている。このように多数の大学を擁しているのに、1820年から1920年にかけて、ドイツの大学に留学したアメリカの若者は9,000名を数えたという。1880年の時点で、ハーヴァードの教員は56名、学生は879名であった。他方、ベルリン大学は同年に233名の教師と4,107名の学生を擁していた。つまりアメリカに大学は数多あったが、その規模は極めて小さかった。とはいえ、国内に多くの高等教育機関があるのに、かくも多くの若者がドイツの大学に渡ったのは、アメリカの大学の規模だけが原因ではない。

アメリカ最古の大学は1636年にマサチューセッツ湾議会が支出を認めた僅か400ポンドの資金によって設立された「ケンブリッジにあるカレッジ」である。このカレッジに1638年に亡くなったジョン・ハーヴァードの遺産のうち1700ポンドと蔵書の全てが寄付された。創設資金の4倍以上の規模である。このことを受けて校名がハーヴァードカレッジに改称される。そのカレッジではイギリスの伝統を受け継ぎ、全学生がお目付け役の教師を擁する寄宿舎で生活を共にしながら、まったく同じカリキュラムの教育を受けた。すなわち10代の子どもを一人前のジェントルマンにしあげる教育がなされたのだが、授業は、そのほとんどがテキストの暗唱・復唱であった。そこに求められるのは、テキストの内容をどれだけ忠実に再現し、適切に翻訳するかであって、内容の吟味や解釈をめぐる議論などは全く行われなかった。すなわち、アメリカの大学は、規模のみならず、そこで行われる教育の質においてもドイツには遠く及ばなかったのである。

24時間に亘って教師に監視されるアメリカのカレッジ生活を経験したのち、ドイツに留学した者はそこで大なる解放感に浸り、大学教授が自由でおおらかな精神の持主であることに驚きと感銘を覚えた。学生の知的好奇心を重んじるゼミナールにも強く心を揺さぶられた。暗唱によって学ぶことなどない、知的な冒険にこそ学びがある。多くの留学生がそのことを確

認したに違いない。

そのような体験を経てアメリカに帰国した後、大学教員に任用された、あるいは大学教員に復職した者は旧来の伝統的なカレッジの教育を改革すべきだと考えた。しかし、留学経験のない教師に、その意義が理解できるはずもない。ハーヴァードをはじめ、いくつかの大学では教育の在り方をめぐって学内に大きな亀裂が生じるようになった。大学教育に対する不満は、カレッジの内部から発生するのではなく、卓越した外国モデルとの接触から生じたのである（Ben-David, J.）。一つのテーマに飽くことなき調査研究を重ね、そこから独創的な知見を引き出し、同様に調査研究を重ねている仲間と、その独創性を競い合うことが研究に相応しいと考えるドイツ帰りの教師は、子ども向けのジェントルマン教育を専らとするカレッジをドイツモデルに倣って改革すべきだと考えた。しかし、保守的な教師陣によって、それは幾度も打ち砕かれる。ドイツ帰りの教師たちの願いがかなうのは、カレッジにある意味見限り、これとは別の場所に研究と研究者の養成ができる場所—大学院—を創設してからのことである。

Ben-David, J. (1977) *Centers of Learning, Britain, France, Germany, United States*, McGraw-Hill

肉屋の息子だったジョン・ハーヴァードはイギリスのエマニュエル・カレッジで学士号と修士号を取得した後、1637年にアメリカに移住。その翌年、急逝するが、生前にはその遺産の使い道を指示していなかった。つまりまたまボストンで亡くなったジョンの遺産を他の人がカレッジに寄付したのである。したがってハーヴァード・ヤードにあるジョンの銅像に記されている文字「Founder 1638」は誤りである。多くの人にとってハーヴァード大学創設の経緯など、どうでもいいことなのかもしれないが、ジョンの銅像の誤りを誰も直そうとしないことが素晴らしいと思う。正しいことはたとえそこに刻まれていなくても、知る人が知っていればよい。感謝を込めて作られた銅像を造り直すのは、その制作者に失礼である。そんな余裕のある姿勢が感じ取られたりする。



シラバスの読み方ガイドのご案内

教育推進部准教授 山田 嘉徳

シラバスは授業の設計図であり、履修にあたって重要な資料となるものです。一方、新入生にシラバスについて尋ねると、「履修登録の前にシラバスを見ても、シラバスの見方がわからない」との答えが返ってくることは珍しくありません。「シラバスに書かれていることのなかで、何が一番大事なポイントなのかわかりづらい」という声も耳にします。さらに、「成績評価の項目にざっと目を通す程度で、（シラバス通りに授業が進むとも限らないので）全体を見ることはない」という声に触れることもあります。なおこうした所感を把握する目的で、シラバスの捉え方を調べた研究報告

がありますが、それによるとシラバス全体のうち、成績評価の項目が優先的に確認される傾向を示したものがあります。

こうしたシラバスに対する実際の学生の声や現行のシラバスに求められる役割に鑑み、本学での学びをより充実したものにしてもらいたいという期待をこめて、＜シラバスの読み方のコツ＞をまとめました。シラバス全体をよく読んで授業に臨むことは、その授業が何を目指しており、どこに向かっていくために開講されたものであるかを知ることができ、自分の学び方を見つめることにつながります。また新入生に限らず、2年次以上の皆

春学期のFDプログラムを紹介します

教育推進部教授 岩崎 千晶

1 新任教員研修(FD Café)

春学期開始後に教育開発支援センターが最初に行う教員向け研修は、新任教員研修です。毎年4月中旬に実施しています。今年は16名の先生方(勤務歴3年未満)にご参加いただきました。新任教員研修では三浦真琴教授が講師を担当し、学生が主体的に参加するために、教員が何に配慮すべきことなのかについて、ワークを交えて話し合いました。体験型のワークとなっておりましたので、参加者同士で盛り上がりしました。前田裕学長、岡田忠克副学長も全プログラムに参加いただきました。3年連続で参加して下さる先生もおられます。関心のある先生はぜひご参加いただければと思います。



2 FDトークセッション

教員同士で授業について気軽に話し合える場の構築を目的に、FDトークセッションを開催します。すでに終わったプログラムもありますが、春学期は下記を予定しています。教育推進部の教員だけではなく、学部の先生を講師としてお招きし、実際の教育実践について語っていただきます。セッションは20分の話題提供、30分のディスカッションから構成されています。ご参加

いただきやすいように、オンライン形式とし、短い時間で参加いただけるようにしています。途中入退室も可能ですので、気軽にご参加ください。申し込みの詳細に関しては、教育開発支援センターのホームページ、メールマガジン、学舎等のポスター、教員ポストに投函された資料を確認いただければ幸いです。すでに終わったセミナーに関しては動画で内容を確認いただけます。

実施時期	担当講師	タイトル	内 容
5月29日 (実施済)	堀潤之(文学部) 中澤務(文学部) 岩崎千晶(教育推進部)	アセスメントプランの確立に向けたルーブリックの活用: 文学部における 4年次ゼミ活動を事例に	学習の質を高めるために各学部がアセスメントプランを策定し、公表しました。このプランを確立するため、文学部ではディプロマポリシーに基づいたルーブリックを開発し、2023年度から4年次のゼミで活用しています。トークセッションでは、文学部の堀潤之教授と中澤務教授にご登壇いただき、ルーブリックを活用した教育実践に焦点を当て、卒業論文作成における具体的な取り組みを紹介していただきました。
6月12日 (実施済)	岩崎千晶 (教育推進部)	大規模授業での アクティブラーニング・ フィードバックの方法を 考えよう!	数十名、数百名の学生が受講する多人数講義ではアクティブラーニングをすることは難しいのでしょうか?学生の意見を聞いて、フィードバックをすることは不可能なのでしょうか?多人数講義を担当する先生方(それ以外の先生も)で、多人数講義における工夫や課題について意見交換をし、多人数講義におけるアクティブラーニングの方法を考えました。
7月10日 (水)	植木美千子(外国語学部) 岩崎千晶(教育推進部)	生成AIを活用した 教育実践を共有しよう!	教育・学習の場で生成AIを効果的に活用するにはどのような方法があるのでしょうか?また学びの質を高めるために、学生が生成AIをうまく活用するにはどのような方法があるのでしょうか?生成AIに関連する課題も踏まえながら、これらのテーマについて参加者同士で考える機会となっています。奮ってご参加ください!

さんも、シラバスの見方を再確認することで、ぜひ自らの学び方を振り返るツールとして積極的に活用していただきたいと思います。授業担当者に、授業でわからない内容をシラバスに沿って確認したことで、結果として授業計画などが見直され、当該の授業を改良するきっかけにつながったという事例もあります。

教職員の皆さまにおかれましては、修学指導や履修ガイダンスにおいて、ご利用を検討いただけますと幸いです。ご意見もどうぞお気軽にお寄せください。

こちらのQRコードより、ご覧いただけます。



新入生のみなさんへ

履修登録前に確認すること
(シラバスについて)

教育開発支援センター

卒業生寄稿

ラボでの経験、イマの私

静岡県立大学短期大学部講師 上田 一紀 (関西大学社会学研究科修了)

皆さま、初めまして。私は現在、静岡県立大学短期大学部で教養教育を担当する教員として勤務しています。富士山を眺めながらのびのびと教育研究活動を行っています。静岡に赴任する以前は教育推進部のライティングラボのチューターとして勤務していました。ここではラボでの貴重な経験とイマの私について少しお話させていただきます。

ラボには、レポート課題、留学の志望理由書、卒論等、様々なタイプの文章作成に悩む幅広い学年の利用者が訪れました。なかには入学早々レポートを課され困り果てている新入生もいました。当然、書く力が洗練されていない利用者に手取り足取り文章の書き方を一方的にレクチャーすることは可能です。しかしそれだけでは自律的な学習者の育成はできません。

そのため当時の私はラボでの先輩・同僚と協働しながら、「対話」「気づきを促す」「当事者性」「主体性」等をキーワードにセッションを行うことに注力しました。なぜ、こうしたマインドがラボ内で涵養・共有されて

いたのか今考えてみると、(チューターが超優秀だったからだ! (笑) というわけではなく) ラボの運営に携わる教員が見えない所で制度や環境をしっかりと設計してくれていたことが大きかったのだと思います。表舞台に立って支援を行うチューターを陰ながら支える縁の下での力持ちの存在の肝要さに気が付かされました。

ラボで培った(実は知らず知らずのうちに培われていた?) マインドは、イマの私にしっかりと根付いており、講義計画の策定や受講生とのコミュニケーション等の様々な場面で活かしています。今後は私も、誰かの学びを陰ながら支えることのできる能力や実践力を身に付けていきたいと考えます。



富士山@富士市より筆者撮影

CTL 掲示板

2023年度ライティングラボ活動報告

ノートルダム清心女子大学情報デザイン学部講師 大西 洋
(前職 関西大学ライティングラボ アカデミック・アドバイザー)

昨年度は延べ1,330件の個別相談に対応しました。2022年度が過去最多の1,397件で、その件数には及びませんでしたが、ほぼ前年並みの利用がありました。学期別の内訳としては、春学期の利用が711件、秋学期の利用が619件で、月別の内訳を図に示しました。なお、春学期末や秋学期末の休業期間中にはオンライン相談のみの特別開室を実施しており、合計で53件の利用がありました。

場所別では、千里山キャンパスの総合図書館と第1学舎のラボで、利用件数が1,000件を超えています。千里山キャンパスでの利用が大半となっていますが、高槻・高槻ミューズ・堺の各キャンパスのラボも一定数の利用があります。また、昨年度は2022年度に比べてオンライン (Zoom) での相談が減少しましたが、春学期・秋学期とも100件以上の相談に対応しています。曜日別では、春学期は週の後半に利用が多い一方で、秋学期は週の前半に利用が

多くなりました。時間帯別では、各時限の前半に予約が多くなる傾向にあります。学年別・種類別では、春学期は1年生のレポートに関する利用が多く、秋学期は4年生の卒業論文に関する相談が多くなっています。

利用者アンケートでは、「ライティングラボに来室した目的は、達成できましたか?」という設問に対して、99.3%が「達成できた」「まあまあ達成できた」と肯定的な選択肢で回答しており、利用者の満足度が高いことがうかがえます。

ライティングラボでは、新入生指導行事やオープンキャンパスでのイベント実施、SNSでの広報など、より多くの学生に個別相談を利用してもらうための広報にも注力しています。また、各学部や授業担当の先生方からの各種のご依頼にも、積極的に対応しています。詳しくは、下記QRコードをご参照ください。

利用案内(教員向け)

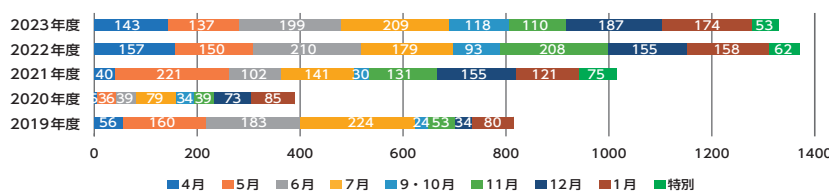


図: 直近5年間におけるライティングラボの月別相談件数

教育推進部 教員の活躍

山田嘉徳准教授が寄稿した連載が文部科学教育通信に掲載されました。

- 連載・「大学教育」の研究現場から一質的研究者の物語
学びのプロセスを明らかにする研究法の探究
文部科学教育通信 (571) 24-25 2024年1月
- 連載・「大学教育」の研究現場から一質的研究者の物語
出会いを通して質的研究法を学ぶ
文部科学教育通信 (572) 26-27 2024年1月

●記事テーマ募集

読みたい、知りたいテーマなど、ご意見をお寄せください。
編集事務局 ctl-staff@ml.kandai.jp 宛、
タイトル【CTL ニュースレター記事テーマ】と明記

●活動報告はWebをご覧ください

KANSAI
UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター CTL Newsletter

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-0230 MAIL: ctl-staff@ml.kandai.jp
<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/>

発行日/2024年6月17日 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター